

安岡正篤

(やすおか まさひろ、1898年(明治31年)2月13日-1983年(昭和58年)12月13日)は陽明学者・思想家。現在の大阪府中央区生まれ。

1922年(大正11年)に東京帝国大学の卒業記念として執筆され出版された『王陽明研究』が反響を呼ぶ。

自民党政治家のアドバイザーとして主に東洋宰相学、帝王学を説き、彼らの「精神的指導者」「陰の御意見番」「首相指南役」の位置にあった他、1958年には安倍源基らとともに「新日本協議会」を結成、安保改定運動や改憲運動などに関わった。東洋古典の研究と人材育成に尽力する一方で、「体制派右翼」の長老としても政財官界に影響力を持ち続けた。また、「平成」の元号の発案者と言われている(1990年に竹下登が記者会見で示唆)。「全国師友協会」は遺言もあって解散したが、各地域の支部がそれぞれ独立した団体として活動を続け、その思想を継承している。

安岡には政界だけでなく、財界にも多くの心酔者がおり、三菱グループ・近鉄グループ・住友グループ・東京電力など多くの財界人をも指南していたとされる。

終戦時、昭和天皇自身によるラジオ放送の終戦の詔書発表(玉音放送)に加筆し原稿を完成させたことから皇室からも厚い信頼を受けていた。

数々の伝説を残し、政界・財界・皇室までもが安岡を頼りにしていたことから「昭和最大の黒幕」と評される。

佐藤栄作の首相就任前の訪米時に応対辞令の極意を授け、このときのケネディ大統領との会談がケネディに沖縄返還交渉開始を決断させたと言われる。

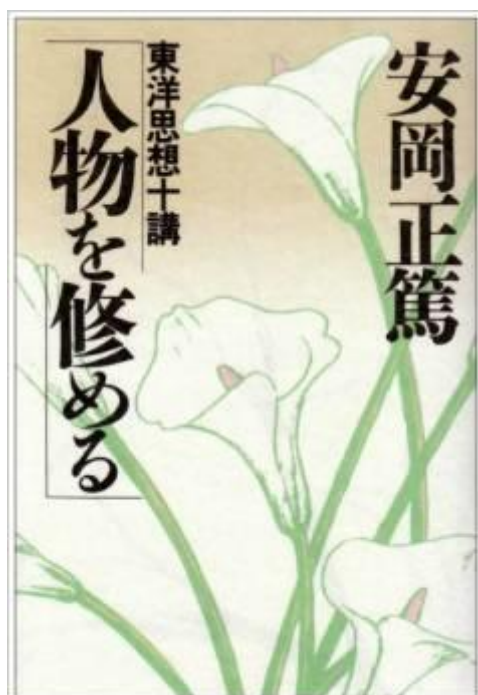
生前、「いつか昭和が終わったら次は平成というのはどうだろう？平和が成り立つのいう意味だ」と平成の元号を考案したと言わ

れているが、今をもって真偽は不明である。戦後の歴代総理に「日本の黒幕はだれか？」と聞けばほとんどの首相が安岡正篤の名前を挙げたという。



1983年、当時銀座のバーのママムであった細木数子と再婚の約束を交わした[5]が、当時85歳で、認知症の症状があったと言われ、40歳近く歳の離れた女性との再婚であり、実際の結婚生活がほとんどなかったことから安岡家の親族が猛反対したが、細木が安岡と交わしたとされる「結婚誓約書」なるものを元に、婚姻届を提出し、受理されたことで、安岡家は東京地裁に「細木との婚姻の無効」を求める調停を申し立てた。その翌月安岡は他界。調停は婚姻はなかったこととして、細木が初七日で戸籍を抜く事(結婚生活は、事実上無し)で決着した。

「人物を修める」



岩澤正二、住友銀行副頭取時代に安岡正篤の講座を住友銀行の幹部を対象に 10 回開き、それをまとめ「東洋思想十講」という本にし、それを再版したのが「人物を修める」

<谷口の目線>

ことを成すにあたり、勉強不足。
勉強するには過去の古典に学ぶのがよい。
それが、仏教、儒教、神道。

書物のなかには、仏教、儒教、神教などの説明もありましたが、その説明よりも、私自身が気になった安岡正篤の言葉やフレーズ、考え方を抜粋しました。

第一講

中国と日本の民族性と社会道徳

治乱興亡のなか日本ほど歴史的に恵まれた国はない
地の利、島国、
日本、単一民族、単一言語
中国、戦争革命の繰り返し

中国は、安定永続に信がなく、地位、栄誉
財産生命すら確かでない

日本 「生」
中国 「老」「なれる」「ねれる」
老獪な人間
容易に喜怒を外に出さない真実を表さない
老酒と生酒との違い
生、純粹できびきびしていてそれで単純

第二講 道徳

個々まで発達した科学技術は今後改めて道徳と結びつかなければ恐るべきじゃ滅に瀕するにちがいない。1964 年 NATO ブラッセル会議ニクソン特物補佐官モイハン

道徳≠宗教

東洋学の原理ではピントはずれ
これがなければ宇宙・人生が成立しないも
っとも本質的なもの「道」
人間は自然の一部

西洋 人間と自然と対立、自然を征服変革すること
東洋 天人合一

宇宙生成の本質であり、天地人間を貫くところの創造・変化いわゆる造化の本質原理である「道」が人間を通じて現れたものが「徳」

道徳と宗教、敬と恥

「人の人たる所以は実に「道徳」をもって
おるということです。そしてそれは、「敬」
するという心と「恥」という心になって現
れる」

「敬を知る人は、必ずよく恥を知る人であり、
恥を知る人は、必ずよく敬を知る人である」

「事業でも力づくでやっておるといづれ競争
になって困難になる。事業が人間性から
滲み出た徳の力の現れであればこれを徳業
といいます。」

「陰陽」

「分化・発展してゆく力を「陽」といいます。ところが創造というものは陽だけでは成り立たないのです。それは分化すると末梢化して生命が薄れるからです。分化・発展は混乱になり破滅になる。そこで一方において分かれるものを統一してそれを根元に含蓄しようとする働きがある。その動きを「陰」といいます。この陰と陽が相まって初めて健全な創造が行われるのであります。」

「易学」

「陰が根本であって要は枝葉花実的、陰だけでは発展ということがありません。陽が活動して代表になってそれを陰が裏打ちし内に含んで初めて両方が存在するのです。陰陽の割合は陰が51%陽が49%ぐらいであるのが一番妥当であります。」

「よい例は人間の男と女です。」

「徳というものは、これは人間の本質的要素ですから陰性のものであり、それに対して才能や技能は属性的ですからこれは陽性であります。徳と才とが相まって共に偉大な発展をしている人を「聖人」といい反対に才徳ともに空しき人を「愚人」といいます。常人の場合徳が才よりもいくらか優れている人と才が徳よりもいくらか優れているひととがあります。」

「前者が君子、後者を小人」

「ケチな君子もいれば偉大な小人もいる
西郷隆盛は君子、大久保利通や勝海舟は偉大な小人といえます。」

政治

「大衆・民衆というものは陽原理的なものですから放っておくと必ず利己的・闘争的になって、ゆあがて混乱し破滅に陥ります。」

「文明もある程度発展すると枝葉末節が繁雑になりやがて墮落して衰退して衰滅にむかいます。そこで反省して悪いところを思い切って省くことが必要であります。それをやらぬと文明が繁栄によって亡びること

は歴史が証明しております。」

第三講

「人間である以上は愛でも敬愛でなければなりません。」

老婆心

「才智・技能は勝れるということはよいもので望ましいことではあります。けれども、それだけでは人間として失格です。やっぱり、人間として至るためには、人に真心を尽くす、世間からいうならばうるさがられるほど思いやることが大切です。」

「公害というものはすべてこれ私害が大きくなったものです。」

一燈照隅

「自分の存在がいかにか小さくささいであっても、一燈となって一隅を照らしてゆく、そうすればやがてそれが百、千、万と集まって万燈遍照あまねく社会を照らし国を照らすことになります。」

第四講

シンギュラーポイント、ハーフウェイ

ものの見方

1. 長い目
2. 一面でなく
3. 仕様末節でなく根本

第五講

中国の国境の意識 文化の及ぶ程度

「要するに学ばぬからこうゆう混乱が起こるのです」

人間の本性の徳性と知能技能といった属性

「知能・技能というものは、徳性を待って初めて好ましいもの、嘉(よみ)すべきもの、尊いものになるのでありまして、反対に徳から離れるに従って悪くなり、いつわりになります。」

「かえって知能や技能が人間たることを損なうことが多いのであります。」

「その証拠にばかばかり犯罪をやりません。罪をおかすのには、相当知能や技能がいるからです。」

「近代の文明というものは、つい最近までは人類の非常な誇りでありました。ところがそれが次第次第に自然を汚し、自然の理法破るという思わざる問題が発生してまいりまして、その結果今日では、人類は文明によって発達したが、その文明によって滅亡する、と言われるようになってきておるわけでありまして。」

民主主義

イタリーのマッシーニ

Progress of all, through all, under the leading of the best and wisest

「日本の議会は妙な議会である。会して議せず、議して決せず、決して行わず。」

第六講

専門的愚昧(ぐまい)

「専門家としては練熟しておるけれども、まったき人間・まったき人生としては片輪不具であるということになります。」

人間としての正しい教養

「古来の儒教とか、仏教、神道というような文化、信仰・教学というもの」

第七講 儒教

四大聖人

釈迦、孔子、ソクラテス、キリスト

孔子の儒教 偉大なる生の学問

天地の大徳を生と曰ふ
生生之を易という

儒教の本質はこの天地・人間を通づる生の道、生の徳を解明して、その厳粛な理法に則って思案し、実践してゆくところにあるのであります。

孔子の儒教 偉大なる生の学問

天地の大徳を生と曰ふ
生生之を易という

「儒教の本質はこの天地・人間を通づる生の道、生の徳を解明して、その厳粛な理法に則って思案し、実践してゆくところにあるのであります。」

儒教の人物論

「儒教の生の研究、人間は一生を通じて何をつくってゆくのか」

「元気」もと、おおいに、はじめ」

認識 知識

「人生の行動を取捨選択したり決定したりする知的能力がでてきます。これを「見識」、これにより、道徳的・真理的判断ができるその見識に実行力が伴ったものを「胆識」

「見識、胆識が生まれると次第に人間ができてまいります。」

度量が大きい

「知識・器のすぐれていることであります」

「見識が伴ってくると、精神的に自立し、判断力が発達するので「信念」を持つようになる」

「風韻」「気韻」自然運行のおおいなリズム、風格が生まれる

人物を観る原則六驗と八観

六驗

1. 之を喜ばしめて以って其の守驗す
2. 之を楽しましめて以って其の僻(へき)を驗す(僻、かたより)
3. 之を怒らしめて以って其の節を驗す
4. 之を懼(おそ)れしめて以って其の特(独)を驗す
5. 之を哀しましめて以って其の人を驗す
6. 之を苦しめしめて以って其の志を驗す

八観

1. 貴ければ其の進むるを観る
2. 富めば其の養う所を観る
3. 聴けば其の行う所を観る
4. 習えば其の言う所を観る
5. 止(いた)れば其の好む所を観る
6. 窮すれば其の受けざる所を観る
7. 賤なれば其の為さざる所を観る
8. 通ずれば其の礼する所を観る

人間の五交

絶好論

勢交、賄交、談交、窮交、量交

素交 利交

忘年忘形

第八講

「その中国がそういう権謀術数のいろいろな歴史過程を経てゆくうちに、やがて春秋戦国時代になりますと、しからばいかにしてこれと対応するか。ということが問題にされるようになってまいりました。そうしてこういう兵学、つまり戦術・戦略・政戦・政略にだまされたりもてあそばれたりしないと同時に、これを圧倒してゆくものはなにかといううと、結局は道徳よりほかにはないということになったのです。いかなる詐術・詐略・権謀術数も、やはり人間である以上最後は道義には勝てない、という結論に中国の先覚は到達したのでありま

す。」

それが儒教

「老獯な国を相手にして両国間の関係を打開しようというのには、よほどこちらも練達・老練でかつ見識、手腕、度胸を兼ね備えた人間でないと勝負にならないことは明白であります。日本も少し善い意味で、すなわち老獯でなく老練・練達の政治、また、そういう政略・政策が欲しいものであります。」

「儒教では、「利は義の和」であり、「義は利の本」」

「利に放(よ)(ほしいまま)って行えば怨み多し」

「夫子の道は忠恕のみ」

中(忠)

「人間が依って立つ現実というものは、決して単純平易なものではなく、いろいろ矛盾・撞着(どうちやく)を含んでおります。その矛盾・対立を統一し解決して、すこしでも高い次元へ進歩向上させる動きが「中」」

恕

「造化は万物を生み育て、これをどこまで化して進歩向上させていく」

「没法子(メイファーツ)

日本人、もうだめだ、仕方がない

中国人、仕方がない、よーし、やり直した

「(中国は)歴史的には絶えず侵略・征服、内乱・革命を体験してきておりますから、財産だの、地位だの、名誉だの、時には命さえも、非常の場合には、実に宛てにならぬものだということを知り抜いております。」

always to begin, don't grieve to end

日本人は、すぐに地位だの財産だのといったもので人を評価します。

儒教を一言にして申せば、終身・齊家・治国の学問

時務の学

現代にいかにあるべきか、
いかになすべきか

中国

「ところが、相手はなにしろ始末の悪い共産主義政権であります。これは儒教から申しますと、最も嫌う権謀術数、すなわち兵家の学、具体的に申せば「孫子」「呉子」「六韜(りくとう)」「三略」などの現代版が中心をなす考え方・老獪なイデオロギーに長けた国でありますから、到底アメリカのような民主主義国を相手にするようなわけにはまいりません。」

民族性の相違

「元来、日本人はとにかく単純にすぎます。それは幸いにして日本が四面海をめぐらす島国であり、歴史的に万世一系の天皇を戴いて、同一民族・同一言語、一度も外からの侵略を受けることなく、平和と統一に恵まれて発達してきたからであります。ところが中国は全く正反対で、絶えず周辺の異民族の侵略・征服を受け、これに対して叛乱・革命をやるという、治乱興亡の歴史を数千年にわたって繰り返してまいりました。だから中国は戦争とか謀略というものにたいへん長じております。なかなか奸悪というか奸佞(かんねい)というか、油断も隙もない人物が多い。」

「日本と中国の国体、民族性の違いを最も単純明瞭に表せば、「生」と「老」であります。日本はなまの文明、生の民族であるのに対して、向こうは老の文明・老の民族であります。老は年をとる、練れておる、な

れておるという意味で、善くいえば老練・老熟、悪くいえば老獪であります。これに対する生は、よい意味においては生一本であるが、それだけになま未熟であるという弱点を持っております。」

酒の例、日本酒の生の一本と老酒

老酒、

まったりと練れて、飲むほどにほんのり酔いがまわってくる

日本酒、

きゅっときて刺激は強いが、その代わり醒めるのも早い

「笑中刀あり」「服中毒あり」

日本人は嫌なやつとそっぽを向く、中国人は老獪でかえって慇懃丁寧

兵法兵学

兵家の学問はこの老獪な理法・戦術
孫子「兵は詐(いつわり)をもって立つ」
あるときは「利をもって動き」

唐の太宗(中国の歴朝の中でも最も偉大な天子)

「わしはあらゆる兵書を勉強したが、要するに相手を詐りをもって誤らしめる、あらゆる手段で錯誤に陥れる、この一語で十分だ。」

風林火山

「其の疾(はやき)きこと風の如く、其の徐(しずか)なること林の如く、侵掠(しんりやく)すること火の如く、動かざること山の如く」

この後に「知り難きこと、影の如く、動くこと雷震の如し」